

# 日本医史学雑誌 第四十二卷第一号 目次

原 著

日本における早発癡呆——〔精神〕分裂病〕概念の受容

岡田 靖雄……………三

『医語類聚』の著者 海軍大軍医 奥山虎章

深瀬 泰旦……………六

マルピーギの医学論

伊藤 和行……………六

不破家華岡流手術記録の検討

山内 一信・不破 洋……………六

研究ノート

『存真環中図』——『史記』幻雲附標所引文からの検討

宮川 浩也……………七

資 料

江戸幕府の医療制度に関する史料(七)——鍼科医員上田・吉田・山本・畠山家『宮医家譜』

香取 俊光……………八

池田文書の研究(十四)

池田文書研究会……………九

記 事

消 息

第三五回医学史研究会・日本医史学会関西支部一九九五年秋季合同総会

長門谷洋治……………一〇五

例会抄録

一九世紀アメリカ非正統医療における癒し・出産・自己形成——植物治療運動と水治療運動

鈴木 七美……………一〇六

多紀家関係の諸話題略記

矢数 道明……………一〇七

多紀元堅の墨跡

町 泉寿郎・小曾戸 洋……………一〇九

多紀元堅の著述

真柳 誠・郭 秀梅……………一一

不潔の水を善水にする法——スウェーデン法は正しいか

中西 淳朗……………一二四

紹介

個人史研究におけるプライヴァシー問題―討論していただくための試論―

岡田 靖雄……………二五

小俣和一郎著『ナチスもう一つの大罪、「安楽死」とドイツ精神医学』……………二七

泉 彪之助……………二七

山下政三著『脚気の歴史―ビタミンの発見』……………二八

松田 誠……………二八

山田慶兒編『東アジアの本草と植物学の世界』(上・下)……………三〇

真柳 誠……………三〇

荒井保男著『医の名言』……………三三

大滝 紀雄……………三三

西山茂夫監修『皮膚科の病名由来ア・ラ・カルト』I・II……………三四

中西 淳朗……………三四

松下正明編『続・精神医学を築いた人びと』(上・下)……………三六

岡田 靖雄……………三六

日野秀逸著『保健活動の歩み 人間・社会・健康』……………三七

瀧澤 利行……………三七

スチュアート・スピッカー著 石渡隆司・酒井明夫・藤原博訳『医学哲学への招待』……………三九

伊藤 和行……………三九

〈本号の表紙絵〉

種痘回村と原田帯霞画像

嘉永2年に始まった我が国の牛痘接種は、因伯の地においては原田帯霞・欽哉・謙堂兄弟、松本元泰、田中春桃、景山大輔、今井兼文らの努力によって急速に広がっていった。安政元年(1854)12月7日、鳥取藩は在方役所に布令を出し、また村庄屋には「悪説に迷い種痘が行き届かないと聞く。決してそのようなことはなく、実に自然痘を免ずることに相違なく、次の者は種痘に熟練しているので印鑑を渡し回村するので、村人に疑念なく種痘するように申し諭す」旨の通知を出している。種痘印鑑は気多郡山根村神職原田美濃(帯霞)、医師景山大輔、医師田中春桃、その門弟に出されている。

「右の回村中、村送人足差出し候儀は一切相成らず、止宿致し候節は旅籠代とも嚴重に受取り候よう」とあって、この種痘回村は始めは全くの奉仕事業であった。安政3年には5人の種痘医により、さらに文久元年(1861)には藩内5地区6グループに分けて、23人の種痘医集団で行われている。

これらの痘苗確保と種痘医養成に原田家は多大の努力と経費を要し、家産を傾けた。その主宰が原田帯霞であった。印鑑状は縦30.6cm、横11.1cmの奉書紙で、画像は掛軸となっていて、ともに鳥取県気高郡青谷町山根の原田恒夫氏の所蔵のものである。

(森 納)